

ハイマート Heimat

ぐんま日独協会 会報

2020年12月18日

57号

発行者 鈴木 克彬

発行所 ぐんま日独協会

〒371-0105

群馬県前橋市富士見町石井 2445-219

電話:027-288-4297

E-mail: info@jdg-gunma.jp

ホームページ:jdg-gunma.jp/



1. 会長のことば	2
2. オンライン・ドイツサロン裏方奮闘記	3
3. クマさんづくりの会からお知らせ	5
4. 協会新体制	5
5. 津軽三味線と私の出会い その2	6
6. 日本百名山 - 独訳 (連載 7)	8
7. デザイナー修行奮闘記 (連載 16)	13
8. 広報担当の取り組み	18
9. JG-Connect フェスに参加して	19
10. 特集 マリアンネ・シコラ女史の逝去を悼む	21
11. オンライン懇親会	23
12. 編集後記	24

1. 会長のことば

ぐんま日独協会 会長 鈴木克彬

★ オンライン・ドイツサロンに参加してください

ぐんま日独協会は、平成20年(2008年)6月から、毎月第1土曜日、東京からドイツ人ゲストを迎え、高崎のドイツ紅茶店陶豆屋でドイツサロンを開催してきました。

このサロンは、連続延べ130回を超え、毎回30名程が集まり、ドイツの方との交流もできて、それは楽しく、且つ相互交流・勉強の場(集い)でもありました。

ところが今般のコロナウイルスの発生は、3密対策の観点から、また東京からお客様をお呼びすることが不可能となり、この行事は、残念ながら開催が出来なくなりました。

結論からいうと、協会の運営・行事としては、人が集うことからオンラインを活用する以外、活動する方法がなくなってしまったのです。

幸いぐんま日独協会には、近藤事務局長をはじめ、パソコンに強い会員が数名います。

その人達を中心にして、11月以降毎月第1土曜日、前橋市中央公民館の5階の会議室(広い空間)を借用し、新方式のドイツサロンを開催するとともに、その内容をZoomを使い、オンラインで同時に協会皆様にお送りする新システムでスタートしています。

是非前橋市中央公民館で開催される新システムのドイツサロン、またはオンラインにご参加ください。オンライン参加ご希望で講習会必要の方は、info@jdg-gunma.jp近藤事務局長までお問合せください。この新ドイツサロンにはオンラインで在日のドイツ人が参加される他、ドイツ在住のドイツ人や日本人にも参加をお願いする予定です。

★ ホームページの刷新・改正

今般、遠藤執行理事を中心に、現在のぐんま日独協会のホームページを大幅に刷新する作業を進めています。このホームページは、近日中に改版が終了します。ぐんま日独協会の行事計画他、過去のドイツフェスティバルでのパネル展の内容、会報ハイマートの閲覧等、多岐にわたりご確認いただけます。また行事記録の録画、行事計画等も常にフォローしますので、是非ご覧ください。

★ 相互交流・相互研修の場に

日本とドイツは、共に勤勉で、優れた科学技術を持つ東西の先進国だと思っています。お互いの長所を日々学び合い、吸収しあっていくことが、日独協会の役割だと思います。会員の皆様、共に成長し、健康に気を付け、一緒に頑張っていきましょう。



2. オンライン・ドイツサロン裏方奮闘記

これまでの当たり前が通用しなくなったコロナ禍の春、ドイツサロンも大きく変わりました。3、4、5月は開催を見送りましたが、6月にはオンライン開催に挑戦、8月以降は会場とオンラインの両方で参加可能になっています。と、一言で言ってしまえば簡単ですが、これを実現するのは試行錯誤の連続であったことは想像に難くありません。そこでハイマートでは、舞台裏を覗いてみました。お話を伺ったのは、オンライン開催の仕切り役の近藤さん、動画撮影とオンライン配信担当の瓜生さん、撮影現場取材した宮原さんです。

★ Zoomとは？からはじまった

Zoomとはパソコンやスマホなどを使って簡単にテレビ会議ができるオンライン会議ツール。コロナ禍を機に、世界中で一気に利用者が増えました。これをドイツサロンにも利用できるのではと考えていた近藤さんと、すでにオンライン授業を行っていた瓜生さんを中心にサロンのオンライン化が動き始めます。参加者のほとんどがZoom未体験でしたが、6月6日の初回オンライン・サロンに向けて予行演習や講習を行い、当日は18名が参加して久しぶりに“再会”を喜びました。「けっこうまくいく」というのが大方の感想だったと思います。7月も同じくオンラインだけの開催でしたが、8月以降はZoomを利用できない会員もサロンに参加できるように、前橋市中央公民館の会場からの参加も可能にしました。従来の会場である高崎の陶豆屋さんではスペースの関係で密を避けられず、広い空間をとれる前橋市中央公民館に一時的に場所を変えた訳です。

★ トラブルは絶えず…

たしかに手軽に始められるZoomですが、実際に使ってみるとわからないことも多く、オンラインサロンのスムーズな運営には近藤さんはじめ裏方のみなさんの人知れぬ奮闘がありました。Zoomのホスト役は、サロン開始のかなり前から準備に入り、ひとりずつ入ってくる参加者を承認し、場合によってはうまく入れない参加者に電話で手ほどきをし、発言者のマイクを入れ、ほかのマイクをオフにし、皆で共有するコンテンツを流す、などなど気が抜けません。会場とオンラインの併用もトラブル続きでした。公民館のWi-Fiは通信速度が遅く不安定で接続がときどき途切れてしまいます。会場の近藤さんのパソコンではホスト役が果たせないで、自宅にいる瓜生さんにホスト役がバトンタッチされました。また、スクリーン投影用のパソコンとZoomで話をするためのパソコンを会場に置くと、2台の間でハウリングが起きてしまうので、会場のパソコンは1台しか使えない。ところが1台のパソコンで投影をしながらZoomの会話に参加しようとする、今度は音声小さすぎて会場参加者には聞こえにくい…。次々と起こる問題をひとつずつ解決して、改善がなされてきました。

★ ひとり三役、機材無し ～ 汗だくの動画撮影

8月のサロンで紹介された動画は、会長夫妻のフォークダンス。普通はカメラ、ライト、音声の3名でこなす撮影にひとりで挑んだ瓜生さんでしたが、生憎の曇天で窓からの採光は不十分、踊りながら説明する会長の声がカメラのマイクでは拾えない、ダンスの大きな動きを捉えるのは至難の業、など現場では戸惑うことがいろいろありました。本業は打楽器奏者の瓜生さん、次は9月の会員プレゼンテーションのために、自宅でマリンバの説明動画を撮りました。自分で解説をしながら、右手にカメラ、左手に



フォークダンス解説の動画から

照明を持っての撮影です。何度も撮り直して、私たちが普段目にするののないマリンバという楽器の構造を紹介する動画を完成させました。そして3回目、10月のサロン用の撮影は、調律師吉田さんによるピアノのお話です。ピアノの構造、調律道具、機械部分の動きから調律のしかたまで、たいへん興味深い内容ですが、照明の強度や角度の調整、周囲の騒音などでたびたび作業を中断し、撮影は3時間に及びました。

★ 撮ったあとも一仕事

動画は撮りっぱなしでは使えません。不要部分をカット、必要な部分を結合して、カット間のつなぎ目にトランジションを入れ、画像に合わせて音声を調整、さらに要所要所に字幕もつける…。編集には撮影の何倍もの時間がかかります。こうして8、9、10月のサロン用に3本の録画がつけられました。



動画編集の画面

★ せっかくの動画が…

ところが問題はまだまだあります。苦勞して完成させた動画ですが、Zoomで配信するとスムーズに流れず、参加者側で見ると、せっかくの会長のダンスやマリンバの演奏がぎくしゃくした動きと途切れ途切れの音声になってしまう。10月のピアノの動画は、配信方法を工夫して少し改善されたとはいえ、元の動画の質には遠く及ばず、残念な結果に終わってしまいました。会員のプレゼンテーション用に動画を作成するのはやめて、ライブを中心にするようになりました。(正常な画質の動画はホームページの会員ページ内「趣味創作活動」で視聴できます。まだの方はぜひご覧ください。)



撮影前の打ち合わせ



マリンバ解説の動画から

★ コロナ禍転じて…

世の中のオンライン化が一気に進み、家に居ながらにして様々なイベントや講演会に参加できるようになったのは、コロナ禍の唯一の功績でしょうか。オンライン・ドイツサロンも裏方のみなさんのおかげでわずかな期間で軌道に乗り、興味深いお話を伺いながら共に充実した時間を過ごすことができている。これからますます参加者が増えて盛り上がることを期待しています。(M)

3. クマさんづくりの会からお知らせ

鈴木和子 会員

令和2年8月27日、ドイツ大使館の新任のハナ・クレープス課長さんが来県され、少林山達磨寺、県庁、前橋市役所等を表敬訪問されました。丁度その日は、ぐんま日独協会の「クマさんづくりの定例日」であったため、前橋市民活動支援センター(通称Mサポ)の会議室にお見えくださいました。



クレープス文化課長さんは、若く素晴らしい女性の外交官で、8か国語堪能。クマさんづくりのメンバー一同大感激、お話をしたり、写真を撮ったり、そしてお土産に、手作りクマさんをプレゼント、大変喜んでくださいました。

私達のクマさんづくりのグループは、1年おきに開催されるドイツフェスティバルの中で、一般参加の方々向けの手作り講習会からスタートしました。その準備のために集まった会員が、フェスティバルの後も例会として続けることになったのです。まだスタートして日が浅いのですが、毎月最終木曜日の午後に集まり、和やかな雰囲気でもクマさんづくりに取り組んでいます。

会場は、前橋市中央公民館3階の前橋市民活動支援センター(通称Mサポ)会議室です。見学を含めお気軽にお出かけ下さい。

作品は、家族や友人にプレゼント、可愛い!と言われ、皆さんに喜ばれています。



小人数ずつで記念撮影

4. 協会新体制

事務局長 近藤基晴

ぐんま日独協会は1988年に創立されました。当時、日本の各地に創立されていた日独協会は押しなべてお医者様や大学教授、また地域の指導者たちが中心となった謂わば「セレブの会」で、日独協会員であることはステータスシンボルであり、ぐんま日独協会もそのような位置づけがされていたようです。

その後、ぐんま日独協会では執行部の努力もあり、次第に「一般の会員」も加入し始めました。今ではいろいろな経験をされた幅広い会員が中心となっています。幅広い組織となり地域にも一定程度の貢献をしているものと思います。

これに対して組織は、当時の「セレブの会」の名残が残ったいわば「個人商店」の体裁でした。私は、早く「法人組織」として動けるようにならないとこれからの時代を乗り切ることができないと思っていました。

2019年の第8回「ドイツフェスティバル in ぐんま」の反省会で、ある会員から「会社の組織のように分掌を決めてその内容も文書化して、スタッフ全員が互いにその内容を熟知して能率よく業務を推進できる体制にするべきではないか」という発言がありました。同じ思いの会員が存在していることに励まされて、2020年の役員改選時期に合わせて新体制を築き上げるべく会長に進言して実現したのが今年度からの新体制です。

この狙いは①理事の業務の明確化②それに合わせた担当業務別組織 の二つです。従来の常任理事と理事の役割分担は明確ではなく、1年に1回開催する「役員会」は形式的なものでした。この原因は、常任理事・理事の方々の多くは行政の責任者だったり、他の組織の指導者だったり多忙な方々で、ぐんま日独協会の活動に専念できる環境ではなかったことです。会員の幅が広がったことにより、活動の幅も広がり、ぐんま日独協会の活動に対して実際に汗をかける会員が執行部の業務を担うのが望ましいでしょう。このために新たに「執行理事」という役職を設けてその任に当たっていただくことにしました。これまでの常任理事・理事の方々には理事として大所高所からご助言をいただきます。

分担した執行理事の役割は ①企画担当 ②経理・渉外担当 ③広報担当 ④青年部担当 の四つです。それぞれに責任者を置き、必要に応じて「副」を置きます。この4分掌にまたがるような全体的なことを統括する組織として執行理事全員が事務局となります。

会長と筆頭副会長および執行理事が総会の決定に沿って重要事項を計画・実行していきますが、そのために毎月「執行理事会」を開催します。ちょうどこのタイミングでコロナ禍が発生しました。オンライン活動の推進や、HP リニューアルの推進はこの組織が無ければ不可能だったでしょう。まさに絶妙のタイミングで新組織が生命を与えてくれています。

5. 津軽三味線と私の出会い その2

對馬 良一 会員

津軽三味線ドイツ縦断演奏旅行(2)

平成13年8月23日から9月18日の期間、ドイツ国内演奏回数で言うと18か所でドイツの方々に津軽三味線を聴いていただいた。事件やハプニングがあったが成功裏に終わった。



廣原 武美 氏
(芸名、佐々木 光隼)

ドイツに着いた日の夕方に橋本先生の教え子の結婚式で演奏を依頼された。師匠の石川さんは「弾かせていただけるのであれば何処へでも行きます。ドイツ人の結婚式の披露宴で引けるのも勉強だ」と張り切っていた。私としては疲れていたが、「はじめ君」の代役の実力を知る良い機会と思い行くことにした。1時間位で貸し切りのレストランに着いた。持参したそろいの T シャツですぐ始めた。さすが師匠の石川先生は舞台慣れしていて相方をリードして見事な「じょんがら節」の合奏でした。その後「廣原武美」君が独奏で「秋田荷片節」を弾いた。

正直、彼の三味線を練習でも聴いたこともないので心配していましたが見事でした。「三の絃」の「音澄」も素晴らしかった。安心して聴くことが出来た。披露宴の客からも大きな拍手を戴きホッとして涙がこぼれた。

翌日はデュセルドルフの日本デーの会場で、演奏は気温35度の炎天下の野外演奏会場でした。各国の音楽家も出演していたが在独日本人の家族からも初めて津軽三味線を聴いたが身震いするほど感激しましたと喜ばれた。

また、ドイツの若者が楽屋まで訪ねてきて三味線を触って質問された。困った事は三味線の皮は何の皮か?と聞かれた事でした。動物愛護の厳しいドイツでは津軽三味線の皮が犬の皮であることは禁句でした。

フランクフルトの日本人学校では、生徒、父兄、先生方約400名を対象の演奏会でした。生徒代表の子が“日本の津軽三味線という素晴らしい楽器で音楽を聴く事ができ、日本の文化に誇りを持つこと出来ました”と謝辞を述べた。石川師匠は涙をぼろぼろ流して「有難うと、有難う」と涙声でいった。生徒たちは師匠が泣き出したのに驚きしていたがその後拍手がなりやまなかった。

帰国後私宛に日本人学校の先生から礼状が来たが生徒の感想文も入っていた。演奏者の人が泣き出したのを見て僕も泣いてしまった。僕たちの話を真剣に聴いてくれて嬉しかったです。とその手紙を石川師匠に見せたらまた嬉しいと泣いていた。日本人でも津軽三味線を聴いたことが無い人が多いと思う。



ブラウンシュヴァイク老人ホームにて

その後、ビーレフェルトでは昼夜2回行い、障害者の福祉施設ベーテルで一泊した。ルール地方の工業の中心地のエッセンでは重厚な教会でマイクなしでの演奏でした。リュウネブルク、バードエイハウゼンなどでも大勢の人が津軽三味線の音色に「Wunderbar」の喝采を各地でうけた。

また新聞にも大きく報道された。ブラウンシュヴァイクでは老人クラブで演奏、またザクセン・アンハルト州ハルデンスレーベンの国際音楽祭では世界の音楽家たちも出演した。

次の日は休養日だった。ハーメルンというヴェーザー川近郊にある小さな町での休養でした。日本では「笛吹き童子」で有名な街でドイツでは「ネズミ捕りの男」として有名である。130人の子供たちがこのネズミ捕りの男に誘われて何処かへ連れ去られた伝説で知られている。日曜日だったので街角にある野外舞台でネズミに扮した子供達が「ネズミ捕り男」の寸劇を上演していた。ハーメルンの有力者の招待で舞台の向かい側の家の二階から見物することが出来た。この舞台で津軽三味線を弾こうかと提案したところ、ここでは大きな音出す事は禁じられているとの事でした。石畳みの美しい町で思い出に残った街でした。

ベルリンでは市民俗学博物館での演奏で大使館の方たちも大勢来ていた。

独日協会連合会のブロックドルフ (Thilo Brockdorff) 会長の世話で、音楽家で奥さんが日本の生け花、草月流の師範という Pucks 家に宿泊した。家にはプールがあり豪華な家で翌日はベルリンの壁などを案内してくれた。



グリム兄弟の末裔 ゲルダ・ハッセンブルグ

次の公演地はロマンチック街道の最終地フュッセン(Füssen)である。

橋本先生はドイツの会議のため別行動になり私が演奏者を連れて電車でフュッセンまで行くことになった。ベルリンからミュンヘンまで行き、ローカル線でフュッセンに行く事になった。不安でならなかった。22歳のころ3年間ドイツの炭鉱で働いた経験はあったが40年以上昔の事であり語学に自信がなかった。

フュッセンには迎えの人がいるので心配ないよ、と言われたがミュンヘンに着いたとたんにフュッセン行の発着ホームが変更になっていて大慌て。広いミュンヘンの駅でホームを探すうちに乗り遅れてしまった。1時間後ようやくフュッセン行きに乗ることが出来た。終着駅がフュッセンであると聞いて安心した。居眠りしていると廣原君が「對馬さん信じられないから見てください」とトイレに連れていかれた。すると便器の下から線路が見える。驚きました。衛生面でも最先端行くドイツが垂れ流しのトイレとは……

フュッセンの駅に観光局の若い女性が迎えに来ていた。片言のドイツ語でお詫びした。女性はこれからのスケジュールを説明してくれた。意外と言っていることが理解できたので安心した。「今日、貴方たちは食事後ミュージカルに行くので正装で待っててください。」

と言ってチケットを置いていった。正装、靴、ネクタイ……

ミュージカル劇場はフォルツゲン湖の湖畔に建てられていてノイシュヴァンシュタイン城とホーエンシュヴァンガウ城が見える素晴らしいところにあった。

正装した男女が続々と入場していった。題目は「ルートヴィヒ二世(Ludwig)の生涯」でした。満員で空席は見当たらない。日本語の字幕が出るので楽でした。舞台には本物の馬が何頭も出演した、クライマックスはルートヴィヒ二世が湖の中に沈んでいくシーンで舞台技術の素晴らしいのに驚かされた。

翌日はノイシュヴァンシュタイン城など見学しフュッセン博物館での演奏のため練習やテレビの録画撮りなど全て終え休息していた。私はおやつを買いに会場から外に出ていた。「戦争だ」(Krieg)大きな声に驚かされた。(平成13年9月記)

次号に続く

6. 日本百名山 独訳(連載7)

深田勝弥 会員

21 安達太良山 (1700米)

21 Adatarayama (1.700 Meter)

21-01

あだたらの名は早くも万葉集に出ている。

あだたら ふ しし ねど
安太多良の嶺に伏す鹿猪のありつつも 吾は到らむ寝処な去りそね (3428)

みちのく あだたらまゆみつら お せ き つら
陸奥の安達太良真弓弦はじき置きて 反らしめ来なば弦はかめかも (3437)

叙景の歌ではないから、この安太多良が今の安達太良であるかどうか、確かめる手だてはない。しかしそんな昔にこの山の名が知られていたことは、興味ぶかい。おそらく万葉集に出てくる山では、最北のものだろう。

Der Name „*Adatara*“ steht schon lange in der alten Anthologie *Manyoshuh* (754).

Wenn auch wie ein Hirsch
auf dem Berg *Adatara*
ab und zu läge,
wollte ich dich besuchen.
Verlasse doch dein Bett nicht!

Aus *Adatara*

den Bogen ohne Sehne
noch vernachlässigst du,
warum sollte die Sehne
auf den Bogen ich spannen?

Da diese Verse nicht idyllisch sind, kann ich sie nicht feststellen, ob der heutige *Adatara* ist. Aber es ist interessant, dass seit so langer er bekannt war. Der Berg ist wahrscheinlich am nördlichsten in der Anthologie bezeichnet.

21-02

あずま
東の国からみちのくへかかって、つまり現在の福島県へ入って、郡山から福島までの間で、汽車の窓から左手にあざやかにこの山が眺められる。雪のある時には、その姿は一層立派に私たちの眼に迫ってくる。昔の旅人がこれを見逃すはずはない。

Von Osten nach Norden fahrend, d.h. von *Kohriyama* bis Fukushima eintretend, ist der Berg unterwegs links aus dem Fenster vom Zug klar zu sehen. Vor allem es beim Schnee wäre, wäre seine Gestalt noch mehr schöner. Die Reisenden müssen den gar nicht übersehen.

21-03

その途中の二本松から眺めた安達太良山、それを歌った高村光太郎の詩が、この山の名を不朽にした。この詩人と絶対愛に結ばれた妻の智恵子は、二本松の造り酒屋に生まれた。彼女は東京にいると病気になる、故郷に実家に帰ると健康を回復するのが常であった。その妻のあどけない言葉を詩人は歌った。

Unterwegs von der Stadt *Nihon-matsu* zum *Adatara-yama* geblickt, hat *Takamura Kohtaro* den Namen des Berges in seine Gedichte unvergänglich gesetzt. Seine Frau *Chieko* ist, die in einem Reiswein-erzeuger in dieser Stadt geboren ist und sich mit dem Dichter liebevoll verheiratet ist. Sie erkrankte immer in Tokyo, deshalb erholte sich in ihrer Heimat. Er schrieb die Gedichte von ihren kindischen Worten.

21-04

智恵子は東京に空が無いといふ、
ほんとうの空が見たいといふ。
.....

智恵子は遠くを見ながら言ふ。

あだたたら
安達多多羅の山の上に

毎日出ている青い空が

智恵子の本当の空だといふ。

Tokyo hat keinen Himmel, so klagt *Chi-eko*.

Sie möchte den Echten sehen, so klagt *Chi-eko*.

- - - -

In die Ferne blickend, klagt *Chi-eko*.

Das ist wahr, der täglich blaue Himmel

überm Berg *Adatara*.

Das ist ihr echter Himmel, so klagt *Chi-eko*.

21-05

そしてこの詩人夫妻が二本松の裏山の崖に腰をおろして、パノラマのような見晴らしを眺めた時の絶唱「樹下の二人」の一部に、

あれが阿多多羅山、
あぶくまがわ
あの光るのが阿武隈川。

.....

ここはあなたの生まれたふるさと、

あの小さな白壁の点々があなたのうちの酒庫。さかぐら

それでは足をのびのびと投げだして、

このがらんと晴れ渡った北国きたくにの木の香りに満ちた空気を吸はう。

.....

あれが阿多多羅山

あの光るのが阿武隈川。

Und auf dem Hinterhügel in *Nihonmatsu* sitzend, blicken beide Dichter zum Land wie Panorama über. Ein Teil des Gedichts am folgenden „Wir beide unter den Bäumen“.

Das ist der Berg *Adatara*,

der funkelnde ist der Fluss *Abukuma*.

- - - -

Hier ist deine Heimat,

die Punktchen der weißen Wanden

sind Weinkeller von Elternhause.

Dann Beine sorgenfrei streckend,

lass uns den Duft von Bäumen

einatmen, im heiteren Norden!

- - - -

Das ist der Berg *Adatara*,

der funkelnde ist der Fluss *Abukuma*.



安達太良山

21-06

この詩と同様「ただ遠い世の松風ばかりが、薄みどりに吹きわたっている」秋の末、私もその丘に上がってみた。そしてそこから、ようやく雲の取れた安達太良山を眺めた。それは代赭色に枯れた広い丘陵の彼方にあった。それは一つの独立峰の形ではなしに、いくつかの峰のつながりの姿で立っていた。

Wie in diesem Gedicht: der kalte Wind fegt allein aus der fernen Welt: den Tag im Spätherbst auf den Hügel aufgestiegen, sah ich den *Adatara* unter der endlich gezogenen Wolke an. Er liegt über die gelbbraun gewelkten Hügel, als nicht einziger, sondern als eine Kette von einigen Hügeln.

21-07

地図の上では、その一連の峰に、箕ノ輪山、鉄山、矢筈ノ森、和尚山などの名が付され、その中央の乳首のような円錐峰が安達太良山となっている。(だから俗に乳首山とも呼ばれる。)しかし万葉集や智恵子が安達太良山と見たのは、その小さな乳首だけではなしに、その全体を指してのことだろう。

「あれが安達太良山」と私もつぶやいた。そして「あの光るのが阿武隈川」はどこだろうと振り向くと、反対側に、福島県を縦に貫く凹面帯を隔てて阿武隈山脈が連なり、その麓にその川が流れていた。私は安達太良山に眼を返した。乳首の右に、鉄山、箕ノ輪山、と並び、さらに遠く離れて、もうすっかり白くなった吾妻山が輝いていた。

Auf der Landkarte steht liegen die Kette von den Gipfel *Minowa-san*, *Kurogane-yama*, *Yahazuno-mori*, *Washoh-san* usw. Und der *Adatara-yama* in der Mitte hat den kuppelförmigen Gipfel, wie eine Brustwarze (anderer Name, *Chichikubi-yama*). Aber dieser Gipfel, der von *Chi-eko* und *Manyohshu Adatara* gezeigt, ist nicht allein Brustwärtchen, sondern wohl die Kette von allen Gipfeln in der Nähe. Ich murmelte: „Das ist der Berg *Adatara*. Wo ist der funkelnde Fluss *Abukuma*?“, zurückgeblickt, reiht sich das Gebirge *Abukuma* auf der anderen Seite über längs der Präfektur *Hukushima* liegende Tiefland. Der Fluss fließt entlang dem Fuß von Tiefland. Ich blickte wieder zum *Adatara* zurück. *Kurogane-yama*, *Minowa-san* liegen rechts von Brustwarze. Doch noch ferner scheint der Berg *Aduma-san* (20) schon ganz weiß.

21-08

山へ登る前にその山を望見するのは、登頂を終えて振り返る時と同様、心のときめくものである。山を望んでから、私は二本松から山麓の岳温泉まで車を駆り、そこから安達太良山へ向かった。岳は海拔六百米の高原にある。見晴らしのいい温泉である。安達太良の表登山口であるとともに、背後に広大なスロープを持っているので、正月休みなどスキー客が宿の廊下に寝るほど溢れるという。花やかな色どりで賑わうスキー場も、今は寂しい風に吹かれてきつね色に枯れた一枚の大斜面に過ぎなかった。

Gleichfalls nach dem Abstieg, lässt das Aufblicken zum Berg bevor dem Aufstieg mir, Herzen klopfen. Heute auch auf den Berg zurückgeblickt, bin ich von *Nihon-matsu* bis die Therme *Dake* gefahren, und dorthin gegangen zum *Adatara-yama*. Die Therme *Dake* liegt auf dem Hochland 600 Meter Höhe und hat schönen Ausblick. Weil die Therme sowohl den Eingang zum *Adatara*, als auch hinter die weitere Halde hat, wird die mit so viele Skiläufer

in den Neujahrferien überschwemmt, dass sie sogar auf dem Flur im Gasthaus übernachten sollen. Aber dieses festliche Skigebiet ist jetzt nichts außer großem Abhang, wo die Pflanze unter kalten Wind braun gewelkt ist.

21-09

その斜面を登り切ると、林の中の平らな道が続くが、やがて又急坂になって、勢至平^{せしだい}と呼ぶ茫茫とした原に出る。風が強く、急に寒い。行く手に黒々とした岩で厳めしく立っているのが鉄山である。そのすぐ下にくろがね小屋があった。だいぶ古びた山小屋だが、熱い温泉の湧いているのが何よりであった。岳温泉はここから湯を引いている。

Nachdem ich den Abhang bestiegen habe, führt der flache Pfad in den Wald, doch bald wieder auf den Steilhang, danach bin ich in die überwucherte Wildnis namens *Seishi-daira* gekommen, wo der Wind weht stark und plötzlich kalt. Das ist der *Kurogane-yama*, wo die schwarzen und strengen Felsen auf dem Weg stehen. Es gibt gerade darunter die ziemlich ältere Hütte *Kurogane*. Es ist doch vor allem schön, dass heißes Wasser herausquellt. Die Therme *Dake* bekommt dorthin das Wasser.

21-10

小屋で一泊した翌朝は、細かな雪が風に舞っていたが、雪と岩との急斜面を登って稜線へ出ると、そこは鉄山と矢筈ノ森との鞍部である。天気が良いければそこから反対側に、火口底の沼平を見おろすことができる。三方を物凄い岩壁に取り囲まれたこの平は、その名の通り以前は沼だったそうだが、今は砂地に化している。1900年の爆発でここにあった硫黄精錬所が害を被り七十余人の従業員が全滅したという。しかしそういう悲惨な歴史は知らずに、この平は山中にこっそり秘められた仙境といった感じである。

Am Morgen nach der Übernachtung in der Hütte, schneit es fein flatternd im Wind. Auf der steilen Halde hinaufgestiegen, bin ich auf dem Grat gekommen, wo der Bergsattel zwischen *Kurogane-yama* und *Yahazuno-mori* ist. Wenn es schönes Wetter wäre, könnte man davon in anderer Seite zum Kraterkessel *Numano-taira* hinunterblicken. Der ist in drei Richtungen mit riesigen Felsenwänden umgeben. Obwohl sein Boden wie namens früher ein Sumpf war, ist jetzt der sich in den Sandboden verwandelt. Der Ausbruch vernichtete 1900 dort die über 700 Arbeiter beim Schwefelhüttenwerk. Aber diese Fläche sieht es aus, dass, niemand solche Tragödie weiß, wie das heimlich unerforschliche Gebiet.

21-11

私はその沼ノ平へはおりずに鞍部から馬ノ背を辿って、大きな岩の立っている矢筈ノ森(森などないのにどうしてそんな名があるのだろう)を越えると、稜線はゆったり広くなって、やがて乳首の下へ出た。鉄梯子のかかった岩場を出ると、安達太良山の頂上であった。霧に包まれて眺望は得られなかったが、山頂を極めた喜びに変わりはなかった。

Statt in den *Numano-taira* hinabzusteigen, bin ich vom Sattel, entlang dem Grat, über den *Yahazuno-mori*, wo großer Fels steht, gegangen. Daher wird der Grat breiter. Gleich danach komme ich unter der Brustwarze an. Über den Felsenpfad mit dem Eisenleiter

geklettert, bin ich da auf dem Gipfel *Adatara*. Wegen des Nebels konnte ich den Ausblick nicht bekommen, aber ich freue mich an den Gipfel zu erreichen.

21-12

帰途は岩代熱海の方に下った。沼ノ平の南側の火口壁の上のふちを辿り、それからそのふちを離れて南へ樹林帯の中を下った。広潤な原野まで来て振り向くと、安達太良山は依然として雲の中にあっただが、いま私の通りぬけてきた南斜面の樹林が霧氷をつけて、一面に広がっている景色は、見ごたえのある美しさであった。

Bei der Rückkehr bin ich nach *Iwashiro-atami* abgestiegen und die südliche Seite des Kraterrands entlang nach Süden durch die Waldung gegangen. Als ich in die weite Wildnis gekommen bin, zurückgeblickt, ist der *Adatara* noch in der Wolke, aber die Bäume auf dem Abhang, wo ich durchgegangen bin, wurden vom Eisnebel bedeckt. Die Landschaft war vorzüglich schön.

21-13

伸び伸びと広がったその原野を足任せに下って行くと、保成峠の道まで幾らもなかった。そこから岩代熱海温泉へ出て、二日間のささやかな山旅を終った。

Ich bin in der weiten Wildnis zu Fuß gegangen, war der Weg bis zum Pass *Honari* nicht so lang. Dorther bin ich an der Therme *Iwashiro-atami* angekommen, und endete hier die kleine zweitägliche Bergreise zu genießen.

22. Aug.2020

続く

事務局註:深田勝弥会員は作家故深田久弥氏の甥という関係から名著「日本百名山」の独訳に挑戦されました。北海道から南下しながら掲載しますが、百座を網羅する時間とスペースがないため一定地域に偏らないように選択しながら進めています。なお、深田会員が5年かけてドイツ語版を完成させた経緯が故深田久弥氏の地元の北陸新聞(2020年10月25日付)や上毛新聞(2020年11月18日付)に紹介されました。

7. デザイナー修行奮闘記 - 連載16

井上晃良 会員

** 語学習得の壁を感じる

ブレーメンへ戻って約2週間後、フォルツハイムの大学から手紙が届いた。そこには受験の時に学長から言われた通り、合格ではあるものの1 semester 期間(半年間)入学許可を遅らせる旨が記されていた。更にその入学許可が降りるための条件として、ドイツ語中級(M2)が終了していなければならないことも付け加えられていた。その時点では、私は基礎コースから中級コースのクラスに上がっていたのであるが、ZDaF(外国人のためのドイツ語検定)試験に合格していなかったのである。

ここで当時のゲーテインスティテュート(以下ゲーテと記す)のドイツ語コースについて記しておくたい。ドイツ語をここで学ぶ外国人は、3段階(G1~G3)ある基礎コースを修了するとZDaFを受験する。その可否に関わらず、試験修了者は更に3段階(M1~M3)の中級コースで勉強する。中級コースが修了するとMD(中級検定)試験を受験し、上級コースに進む。私の受験した大学は専門単科大学ということもあって、入学条件が中級コース(M2)の修了であった。私の前に立ちはだかる壁というのは、まだまだ高くそびえ立っていることを今回の受験で改めて思い知らされたのである。

語学学校のゲーテでは、相変わらず授業が終わると何となく日本人だけが集まり、一緒に公務員向けの食堂へゆき昼食を取る。結局、日本人だけで集まってしまう。イタリア人やスイス人などは週末に列車で自宅へ戻ったりできることもあってか、同じ母国語の者同士が群れたりはしないようだった。ゲーテの授業だけでは、なかなか上達できず、「このままではまずい」という危機感を感じていたこともあって、私は空いている午後の時間を使ってドイツ語の個人レッスンを受けることにした。ゲーテとは関係のない一般の語学教室でマンツーマンのレッスンを週2回1時間程度受けるのである。もちろんそのために授業料が必要であるが、目的を果たすためには仕方がない。更にブレーメン経済大学日本語クラスのドイツ人学生との交流を活かして、彼らの1人とお互いの母国語を1時間づつ教え合うということもした。つまり、自分自身を追い込む事をしたのである。

個人レッスンでは、教科書はなく先生からは何でも良いから自分の興味のある読み物を持ってくるように言われた。私は、もちろんドイツ語の小説や随筆などを読むことは出来ないので、空いた時間に列車の撮影で訪れるブレーメン中央駅に行き、DBの「Blickpunkt」(視点)というタイトルの利用者向け新聞を授業に持ち込んだ。レッスンでは、ドイツ語で書かれたこの新聞の興味ある記事を読み込むというトレーニングが行われた。初めのうちは、分からない事柄や単語が多すぎたこともあり質問すら出来なかったが、暫くすると単語の使い方やニュアンスの違いなども質問できるようになってきた。ゲーテの授業は、クラス定員が最大25名と日本の学校とは比較にならないが、このレッスンでは先に述べたような私の興味を持つ題材もあってか、読解力がつくようになってきたことを徐々に自分自身でも感じられるようになってきた。

大学生とは、カフェなどで2時間ほど日独の生活習慣の違いなどを中心に遊び感覚で学習した。ここでもパートナーは私の間違っただ癖などをしつこく直されたのは、今に活着ていることを実感する。

ゲーテの授業は、コース毎にクラス替えが行われ、クラスメイトも変わる。私のように長丁場を前提に授業を受ける者は多くはない。気がつけば、いつの間にかゲーテの主のような感じになっていた。そして長く受講していると、事務局から1コースの奨学生の誘いも受けたりする。私のような劣等生でも長く受講していることで受講料無料の奨学生になれるのだからありがたいことである。先程コースごとにクラス替えが行われると記したが、それは担当教諭も同様である。そして不思議なことに教科書も数社の異なる教科書が使われていた。これら数種類ある教科書については、内容的には似ているかも知れないが、編集方法が全く異なり、当然のことながら生徒にとって歓迎しうる教科書とそうでない教科書があった。そしてそれは担任も同じで、教えることが上手な人とそうでない人がいたのも当然である。

**** いよいよ語学試験**

ゲーテで5コース目になった時、つまり8ヶ月も終わった頃であろうか、3回目のZDaFの試験に不合格となった私は、3段階目にあたる中級コースの新しいクラスメイトと新しい教諭の元での授業が始まった。この授業はそれまでの授業とは全く異なり、文章の組み立て方を中心にしつこく叩き込ま

れた。この教諭の教え方が実に合理的で、ドイツ語特有の合理性に合致した説明になっていたのである。私の頭の中で今まで良く理解出来ていなかったドイツ語の文章構造の基本がこの授業でようやくクリアになり、個人授業や学生との交換授業、そしてホームステイ先での日常会話も後押しとなって、一進一退ではあるものの、自分自身のドイツ語が上達しているという実感を持つ日が少しずつ増えてきたのである。この実感というのは不思議なもので、通常は毎日がドイツ語の授業を受けながらも自身の進歩が実感できないのであるが、ある時突然その実感が湧いてきたりする。今思えば当時の実感など全くどうしようもないレベルの話ではあるのだが、この突然の実感というのが度々感じられるのは、私自身にとって、非常に心地よく先への意欲となったのである。この実感を感じる時というのは様々であるが、おそらくドイツ人との会話の中で今まで話すことのできなかった単語や言い回しができるようになった時なのだろうと思う。

そして試験2週間前になった。ZDaFの試験は、1次試験が筆記で文法が中心の4択問題である。問題数が多いため、1問あたり1分程度しか時間が掛けられない。その後合否の発表があり、合格者は面接の二次試験に臨むことが出来る。私はそれまで毎回筆記試験を終えることが出来ず、一次試験で落ちていたので、ステイ先に戻ると今まで受けてきた過去の問題を時計を見ながら幾度となく繰り返しトレーニングし、試験時間の足りない問題を克服する努力だけはした。

いよいよ試験日である。問題用紙に目を通すと、それまで私が受けた時と異なる感触を掴め、事前のトレーニングが功を奏してか、何とか全ての設問を回答できた。1次試験が終了して暫くすると合否の発表である。合格者のみの番号が記された紙を貼られるのは日本の入学試験と同様である。そこでようやく4回目にして私の番号を見つけることが出来たのである。一次試験の合否発表の後、二次の面接試験である。この試験は教室で数人の試験管の前で数問の質問を受け答えるのである。試験は3つのテーマから選択ができた。そのうちの1つが「自動車」というテーマであった。自動車会社に勤め、これからトランスポーションデザインの大学を目指す私には、これ以上のテーマはない。今思えば、試験官からの設問は極めて優しく、しかもゆっくりと話してくれたのだが、私には試験官の話す一字一句を聞き逃すまいと必死である。その設問のやりとりが私は忘れられない。それは「自動車の排気ガスによる公害を減らすにはどのような仕組みがあるか？」という質問。私はしばし考え、「今の最新技術ではハイブリッドで電気モーターとガソリンエンジンを組み合わせて…」などと答え始めると、試験官から答えを遮られ、「そうではなく、今走っているクルマではどうなのか、と聞いている」と嗜められた。すぐさま、それが教科書にも出ていた触媒技術のことだとわかり、説明しなおした。ヘタに自動車に興味があるととんでもないミスを犯すものである。それ以外の質問には、理解も出来ずつなく答えることができたが、先ほどのミスが気になって仕方が無かったのである。

試験が終了し、廊下で長椅子に座って休んでいたところ、1人の教諭が私の前を通りかかり、「君は多分合格だよ」と耳打ちしてくれた。4回目の受験にしてようやく合格出来、安堵した瞬間であった。結局、成績は合否ラインのギリギリであったが、私の帰りを待ち構えていたホストファミリーは、試験結果と成績を聞き、その合格を喜んでくれただけでなく、「資格試験は成績より合否が大切」と慰めてくれた。

**** 休日の楽しみ**

このようなドイツ語やその試験によるストレスがあったものの、土日の週末は学校がお休みであり、休日を利用して IC で1時間程で行けるハンブルクや、その他日帰り撮影に出掛けるのが私の大きな楽しみであった。また世界で最も大きいと言われる様々な分野の見本市(いわゆるメッセ)もドイツで

行われることが多く、例えばハノーファーの工業見本市 (Hannover Industriemesse) へも、クラスメイトと一緒にそのための特別列車 (とはいえ車両は有り合わせの古ぼけた急行用車両で組成され、ダイヤも他の列車の隙間を縫うように走るので時間が掛かる) で出掛けたりもした。面白いのは、見本市の会場まで線路が敷かれているので、特別列車はハノーファー中央駅を通らず直接見本市会場のホームに到着する。帰路も同じ列車でブレーメンに向かうので便利である。このような直通の特別列車がドイツ各地から見本市期間中は毎日運行された。また見本市会場の留置線には沢山の寝台車両が並べられ、メッセ開催中は列車ホテルとなっていた。

ある時、ブレーメン中央駅の旅行センターでいつものように臨時列車運転などの新しいパンフレットを探っていると、ブレーメン近郊のローカル支線が開業10周年記念で蒸気機関車列車の運転を行うとの情報を発見した。ドイツは蒸気機関車が少なからず動態で保存されていて、その運転も時々行われるが、この列車も見過ごす訳にはゆかない。

蒸気機関車に興味があるという日本人クラスメイトを誘ってこの列車に乗りに行った。当日は天気も良く、お祝い気分も手伝って撮影するファンや私たちのように乗車して楽しむファン、そして家族連れなどで賑わっている。日本では今でこそ女性鉄道ファンも見掛けるが、ドイツのそれは、家族連れ、カップル、鉄道ファンと、老若男女様々な人達が思い思いのスタンスでこの記念列車を楽しんでいた。

主役の蒸気機関車は BR38形で、ドイツでは大量に生産された性能も優秀なカマである。ここで走った38形は別名 P8形と呼ばれている。P8形は機関車は1900年代初めに製造され、その性能はもとよりコストパフォーマンスにも優れ、1925年の製造終了まで約20年の長期に渡って3400両以上が当時のドイツの各国王国鉄道のために作られたのである。その事実をもってしても十分にその優秀さが理解出来るのであるが、またそれだけ多くの人を乗せて走ったので、人々には親しみのある機関車でもある。この機関車は動輪直径の大きいO1形のような大型蒸気機関車ではなく、戦前、あの豪華列車で有名なラインゴルト (Rheingold) も牽引し、また人々の日常の足でもあった地域のローカル列車も牽引した汎用性の高い P8形機関車が人々の人気があるのも頷けるのである。記念列車では、この機関車が動態保存の旧型客車を牽引し、列車に乗車したり沿線で写真を撮影したりと、私はもちろん、クラスメイトも初めての蒸気機関車とあって楽しむことが出来たのは良い思い出となった。

**** インターレギオでの出会い**

いつものように週末を使って鉄道写真撮影に出掛けた私は、この時ハノーファーに出て当時の南北ドイツを結ぶ大幹線であるハンブルクとハノーファー駅間での撮影にいそんでいた。まだ ICE が走り始める前である。IC 列車は、ほとんどが103.1形電気機関車牽引であり、ときどき最新鋭の真っ赤な102.1形が同じCIで施された最新のカラーリングを纏って時速200km/hで走る姿は、颯爽として素晴らしい光景であった。そしてたまにやってくる新しい種別のインターレギオ (IR) は、1960年代から製造された UIC-X と呼ばれる年季の入った車両に車体と台枠以外を全て新しくリニューアル改造した客車で、徐々にこの路線に走り始めた時期でもあった。この客車には、台車と車体にヨーダンパと呼ばれる車体安定装置やディスクブレーキを備え、走行最高時速200km/hを誇る。車体は当時ドイツでも問題になっていた車体の断熱材に使われていたアスベストを取り外し、インテリアもレイアウトから見直した新しいコンセプトに基づいて改造されたもの。外観も当時新しい当時新しいブルーのツートンカラーに改められ、1等、2等だけでなく、ビストロカフェと呼ばれる半室軽食堂車も加えられ、一見すると新車と見まがうほどのクオリティを持った車両であった。IRは日本で言えば急行ぐらいの位置付けである

が、供食車両が必ず組成され、ハンブルクとフルダを2時間間隔のダイヤで結び、好評を博した。その理由の1つに IC や EC ではないので特別な料金が不要であったことにもよう。 (50km 未満の乗車については別途 IR 料金が必要)。当時、西ドイツ国鉄は日本同様に赤字体質に苦しめられていて、利用者獲得のため、デザインセンターが精力を傾けて試みた新しい種別が IR である。鉄道車両の価格は高いので、新製はせずリニューアルをすることが多いが、この新しい車両については、今までにない大幅なリニューアル、つまり躯体を除いて全て新しくした。また IC/EC 列車で好評であった1時間間隔の列車ダイヤを補完する意味もあって2時間間隔とした。つまり、運賃、車両、ダイヤ改善の3つを同時に行い、新しい種別として立ち上げたのである。これが奏して、その後 DB 民営化に至るまで路線の拡大が行われ、利用者からも歓迎された成功例となったのである。

さて、私は撮影に出掛けたツェレからゲッチンゲンまでその IR に初めて乗車した。この車両は、非常に多くの新しいアイデアが散りばめられ、当時組成されていた1等、2等、1等/ビストロカフェ合造車の3種類の客車は、全て統一された明るい色調の空間デザインで構成され、それまでのイメージから一新されている。例を挙げれば、向かい合い席では視線が合わないような工夫や、それと共に窓側席には幼児専用席が設定されるなど、車内レイアウトから緩やかなカーブを描いた天井の造形、照明、色彩計画に至るまでインテリアデザインとして良く行き届いている。後に、私が IR 車両と深く関わり合う関係になろうとは、当時は夢にも思っていなかったことである。

この新しい車両を感心しながら眺めていると、向かい側に座った私と少し上ぐらいの男性がニコニコと私を見ている。何気なく挨拶をし、少しばかり話をする、彼も IR に乗車するのが初めてらしく、良い車両だと感心していた。すっかり意気投合して私の拙いおしゃべりに付き合ってくれたが、そのうち彼がハンブルクに住んでいて、「良ければ遊びに来ないか」と誘いを受けた。最初は彼の突然の申し出に驚いたが、悪い人ではないことはすぐに理解できたし、彼の申し出を断るのも忍びなく…と言うか、私もこの若者に少し興味を持ったので快諾し、電話番号と住所を交換して、ゲッチンゲン駅で私は降り立った。別れるときはしっかり握手をして再会を誓った。ホームに降り立った私に、彼は窓を全開にして手を振って別れたのである。日本では考えられない光景であるが、これもヨーロッパならではのもの。楽しい気分ゲッチンゲン駅での列車撮影に臨んだのである。

**** ハンブルクでの散策**

そしてその2週間後の土曜日、私は彼の待つハンブルクに1泊の予定で出掛けた。中央駅で落ち合った私達は、再会を喜びつつ彼の案内でハンブルクの街を歩いた。ハンブルクといえば、古くからの港町としても有名で、あのビートルズが初めてライブを行った場所としても名高い。亡母がこの街に日本の商社のデザイナーとして駐在していたこともあったことから、幼い頃良く母からこの街のことを聞いていたので、ブレーメンに来てすぐにこのハンブルクには訪れていた。

私達の散策の初めはハンブルクの港、と言っても海ではなくエルベ川に沿った港である。以前はドイツの輸出入の中心がこの港であったことから日本企業も多かったが、現在はルール地方のデュッセルドルフがそれに代わっている。彼は、Speicherstadt と呼ばれる運河沿いの美しいレンガ造りの建物が並ぶ倉庫街に連れて行ってしてくれた。そこは、一時期の隆盛はないが、今でもコーヒー豆や中東の絨毯などの倉庫として活用されていて、隆盛を誇った当時の様子を再現した博物館もある。世界で最も巨大な HOスケールの鉄道模型レイアウトが楽しめるミニチュアワンダーランドが後に開館したのもこの倉庫群の一部で、今やハンブルク市の観光名所の一つになっている。17世紀からの歴史を持ち、19世

紀に建立されたこのレンガ造りの巨大な建物の一角に、コーヒー倉庫を利用したカフェもあり、かつての大航海時代にアジアとの交易の拠点の一つとして利用されていたのであろうと当時に思いを馳せつつ、ここで香り高いコーヒーを味わったのである。

巨大な倉庫街を一通り見て歩いてから、ハンブルク港を横目に見ながら二つあるアルスター湖のうち外アルスターと呼ばれる湖へ向かう。外国領事館や高級ホテルが建ち並ぶ瀟洒な住宅街を見ながら外アルスター湖畔を奥へと進むと、幾つかの小川を見つけることができる。そこから奥に貸ボートに乗って小川の探索をする。何もかも初めての私は、北ドイツの大都会を少し歩けば自然に向き合う事の出来るハンブルクの魅力にすっかり取り憑かれてしまった。それにしてもドイツ人の散策はとても距離が長い。最後は彼の足の速さに追いつくことができない程で、とにかく歩いたという印象の強い散策であった。

彼の家に着く頃には陽も暮れ、ドイツらしいパンとハムやサラダなどの冷たい食事をご馳走になり、その後スライドショーが始まった。彼は自らの事を一所懸命ドイツ語がおぼつかない私に理解させようとスライドも使って私に見せてくれた(ドイツでは、パソコンが普及するまでは写真はプリントと同様にスライドショーで披露することが良くあった)。丸1日、ドイツ語のみで彼と会話し、散策で体力もほぼ限界に近づいていた私は、スライドショーを見ている時には睡魔に襲われていて、目を開けているのが大変であった。ただ、彼は私を極東からドイツ語を習得しにわざわざドイツまで来た日本人ということもあったのであろう。彼の私に対する気遣いは、言葉が多少一方通行になったとしても良く理解できたし、気づいたら翌朝になっていたという感じであった。彼には、美味しい焼きたてのパンの朝食をご馳走になって再びハンブルク中央駅まで送って貰い、再会の約束をしてブレーメンへと戻ったのである。

ブレーメン滞在中も終わりに近づくと、日本に居た亡母も友人と一緒にドイツに遊びに来て3人で北ドイツから南ドイツ、そしてイタリアへと旅行できたのは良い思い出になった。

そして大学からの手紙にある通り、書類を揃えて送付し、暫くするとフォルツハイム造形大学から正式の入学許可が届いたのである。ブレーメンのゲートに来てから丁度1年、様々なことがあったが、ようやく最初の大きな目標が叶った瞬間でもあった。

(本記事はイカロス出版株式会社発行『鉄道デザイン EX03』に掲載されたものを転載したものです。同社のご好意により転載の許可をいただいています。)

8. 広報担当の取り組み

広報担当執行理事 遠藤 功

前号において詳細が述べられておりますが、2020年の定期総会はCOVID-19拡散防止のため中止となり、はがきによる票決が採用され、規約の一部改定と役員の変更が承認されました。その結果若干名の執行理事が任命され、その担当として企画、経理・渉外、青年部及び広報の4担当が新設されました。

広報担当の詳細な役割を十分に認識しないまま、岡博子さんと宮越リカさんの3名がその任を任せられることになりました。その後メールでのやり取りやオンライン会議などによりその業務の実態や今後の直近の目標などが明らかになってまいりましたので、ここに紹介したいと思います。

以下に述べます広報の主な業務の全ては、従来事務局の中で行われていたものですが、これを期に当該担当に移管されることになりました。

- 1) ハイマートの編集と発行及び管理
- 2) ホームページのメンテナンスと管理
- 3) イベントなどに関する広報活動
- 4) その他

これらの運用につきましては事務局長を含めた担当内での打合せによりある程度の合意に至り、その後それを踏まえた形で行われた執行理事会の決定やご意見などを基に、以下のような基本方針として確認されたものです。

1) ホームページ

- ① ドイツあるいは日独協会に興味と関心をもって訪れる一般の方々にも注目される内容の探求
数多いイベントや活動のタイムリーな紹介
写真や動画を多用し視覚に訴える要素を多用して訴求力を向上
- ② 過去の実績や記録においても文章から写真や画像を用いた内容に衣替え
- ③ 会員の場を拡充し、趣味や特技の紹介や投稿及び意見の交換の場として活用
- ④ スマホに対応した画面構成の工夫や内容の充実
- ⑤ セキュリティーや個人情報保護などを強化したシステムへの移行

以上の基本方針を盛り込んだホームページの改善策の検討を開始いたしました。必要に応じて、現行の構成を大幅に変更した新たなシステムに移行する可能性も含め、HP 管理会社も巻き込んだ検討を開始しております。

2) 会誌「ハイマート」

- ① イベントや活動記録は従来通り継続
- ② 会員有志の投稿は貴重なものであり、連載が続く限り継続
- ③ 法人会員の紹介を通じて会員との交流の場の提供の可能性探索
- ④ 一般会員の紹介や投稿の場の設定によるコミュニケーションの向上
- ⑤ 会員へのアンケート調査などを活用した紙面の充実の探索

3) イベントなどの広報活動

- ① イベントや企画担当の意向を尊重した広報活動のサポート
- ② 独自活動につながるノウハウの蓄積

いずれにしても他の執行理事担当との連動と会員の皆様のご協力が第一と考えております。従来の事務局での活動と変わらない会員本位の活動に徹してゆきたいと考えておりますので、変わらぬご支援をお願い致します。



9. JG-Connect フェスに参加して

日向 泰史 会員

9月27日に開催された日独ユースネットワーク(全国日独協会連合会所属)主催のオンラインイベント「JG-Connect フェス」に当日のサポート員として参加しました。日独ユースネットワークは、全国各地の日独協会に所属する20~30代の若手会員が所属し、日独青年交流を行っている団体です。昨年9月には当協会の若手会員がホストとなり、高山村でのキャンプ体験や伊香保温泉での温泉学学習の交流イベントを開催しました。

今年のご存じの通り、コロナ禍で世界的にイベントが相次いで中止に追い込まれています。日独ユースネットワークにおいても毎年開催(隔年で日本、ドイツそれぞれがホスト)していた日独青年交流プログラム「ハロープログラム」(詳細：<https://jg-youth.net/halloprogramm/>)が中止となり、今回は異なった形でオンラインイベント「JG-Connect フェス」として開催が実現しました。

イベントでは留学、語学、旅行、映画、自己啓発など多岐に渡るテーマのプログラムが実施されました。私も当日のイベント進行のサポート役として旅行と映画のテーマに携わりこのオンラインイベントに参加しました。

旅行のテーマでは、当日にイベント参加者から自分の好きなドイツの都市の写真を集めて、それぞれの説明を聞きながら即興でトラベルブックを作成しました。参加者からの各都市との思い出話や知られざるマル秘話など、一般の旅行誌とは一味違った独自の視点のものができあがり、最後には、やはりドイツへまた行きたいという気持ちが生まれました。

映画のテーマでは、「映画『第4の革命—エネルギー・デモクラシー』を通じて学ぶドイツのエネルギー政策」として、2010年制作されたドイツの映画を鑑賞し、ゲスト参加者の専門家による、日独の再生エネルギーの取り組みについての説明を聞きました。ドイツで公開された2010年に一番観られたドキュメンタリー映画で、この映画が再生エネルギーの転換に大きな役割を担うことになりました。現に2010年以降ドイツでの再生エネルギーの電力生産量が格段に伸びたようです。映画の内容も非常に心に訴えかけるものがありました。環境問題において先を進んでいるドイツやヨーロッパの国々に比べて、日本はやはり出遅れている感じは否めません。こういった問題を考えることで自らの行動を少しずつ変



左から、日向、プログラムリーダー大川さん、ゲスト参加者高橋さん(株式会社森のエネルギー研究所)、サポート横尾さん

※写真撮影のためにマスクを外しています。



えていく必要があるのでは?と思いました。危機感から生まれた何かを変えるための信念や気概を訴える映画ですので機会がありましたら、ぜひご覧になってください。

今回のイベントを通じて、オンラインという形でしか実現できなかったプログラムが非常に多く、新しい形でそれが実現できたことは非常に良かったと思います。しかしながら、あくまでもオンラインはツールであり、根本は人とのつながりです。今回も多くの人たちとつながることができ、話をし、問題を共有して共に考える時間を得られたことは非常に有意義な時間でした。企画から前日までの大変な準備をしてくれた運営スタッフや、プログラムに参加してくれたゲストの方、そして参加して下さいました皆さますべてに感謝します。当協会においてもオンラインでの活動を行っていますが、活動の幅を広げる新たなツールとして、そして対面でのこれまでの活動もより充実したものになるように、今回で得た知見を役立てていきたいと思っています。

10. マリアンネ・シコラ女史の逝去を悼む

白倉 卓夫 理事

私の敬愛するM.シコラ逝去の知らせを娘さんのコルネリアから受けたのは今年9月初旬、亡くなられた一週間余り後の事だった。網膜色素変性症で視力低下がすすみ、自宅から市の介護施設に移っていた彼女を3年ほど前に妻と見舞ったのが最後となってしまった。

活発で精力的な行動力の持ち主だった彼女のこれまでの面影はなく、穏やかな笑顔をたたえた“普通のお年寄り”に変貌していたのに一瞬驚いた。「日本で幹細胞を使った治療があるとか?」と呟いたのが彼女と交わした最後の言葉となった。コルネリアから届いた死亡通知状の片隅に添えられた“飛び立った鳥ははるか彼方に点となって消え失せた”という辞世の句が死を前にした彼女の真の言葉だったに違いない(添付資料参照)。

シュベール・ツァイツングの紙面にシコラの死を悼む社説が大きく取り上げられた。「彼女は世界に門戸を開放し郷土愛を具現化した」の見出しで始まり、ビベラッハ市の市民大学、市の文化局長として貢献した彼女が90歳で亡くなったこと、「彼女の想像力、行動力、そしてたゆまざる国内外の人々との相互理解のための創造性は模範であった」と讃え、「彼女の人生は民族間の友好を象徴する一生でもあった」と結んでいた(添付資料参照)。

1991年多方面にわたる功績で市民記録文書に彼女の名が銘記され、1996年ドイツ連邦功労十字章、ヨーロッパ国民党ヨーロッパ章などを受章した。

彼女は1931年ウルムで生まれ、経済学を学んだあと外交官夫人として長い間海外で過ごした。帰国後の1972年からビベラッハ市に勤務、ここで19年間にわたり市民大学長として学校の管理、指導を担当する傍ら、職を辞す前の3年間、市の文化局長の重責も担った。長年にわたりエジプトをはじめアテネ、ロンドン、パリ、香港、ベオグラード諸都市で過ごして豊かな国際感覚を蓄え、帰国後は外国諸都市との姉妹都市締結や人的交流に積極的に務めるとともに、市民大学では国内外との市民レベルでの交流、啓蒙活動を活発に推し進めた。私も世界各国から招かれた人たちの講演、演劇、若者たちのコーラスや展示会などを何度もここで鑑賞する機会を持って、私自身も“日本週間”に因って“HAIKU”の講演を依頼されたことがある。蛇足になるが、ビベラッハを訪問した折には自宅、通称“シコラ・ハウス”の客室、通称“アラビアン・ツインマー”に泊めさせて戴くことが多かった。豪華な絨毯

が敷かれ、あちこちにアラビア風家具・調度品が置かれた落ち着いたゲスト・ツインマーだったが、ベッドの真上に懸下され頭の上に迫ってくる重たいシャンデリアは私をリラックスさせ安眠させてくれることがなかった。シコラ・ハウス訪問時には必ず分厚い訪問帳に署名、訪問記録が求められる。2008年、この訪問帳を基にして展開される『歴史のある家—シコラ・シェック・ハウス物語』と題する彼女の回顧本が出版された。日本関係では華道、草月流師範、鈴木氏の訪問、NHK取材班グループの訪問などが記されていた。

日本の文化芸術の深い理解者だった彼女は若い頃から“生け花”を学び、2001年に『偶然の演出』と題する写真集を著わし、ビベラッハ市に“生け花愛好会”を設立、前述の鈴木師範を自宅に招いて庭で“生け花ショウ”を開催するといった市民レベルでの日本文化の理解、発展にも努めた。東京で開催された彼女の草月流師範の証書の授与式に私が代理出席したこともある。1992年、NHK衛星放送開始3周年を記念した特別番組“バロック街道春の歌”でビベラッハ市が図らずも日本全国に放映されることとなった。そのための取材班スタッフの受け入れ、取材のための準備に彼女は指導的役割を担った。魅力的な番組内容で日本全国の視聴者に届けることができた功績は大きい。



死亡通知状



Schwäbische Zeitung (2020.9.10)

シコラの影響もあって、シコラを含むビベラッハ市民団体の日本観光旅行、ビベラッハ市民の家族ドライブ旅行など、かの地の日本への関心は高まった。東京に住み着き今でも交流を深めているビベラッハ市民もいる。

個人的にも彼女には大変お世話になった。ドイツの文豪H. カロツサの旧宅、歴史ある数々の古城々主、あるいは温泉保養地や高齢者介護施設の訪問・見学に特別の配慮を戴けたが、彼女の大変な尽力によるものと感謝している。

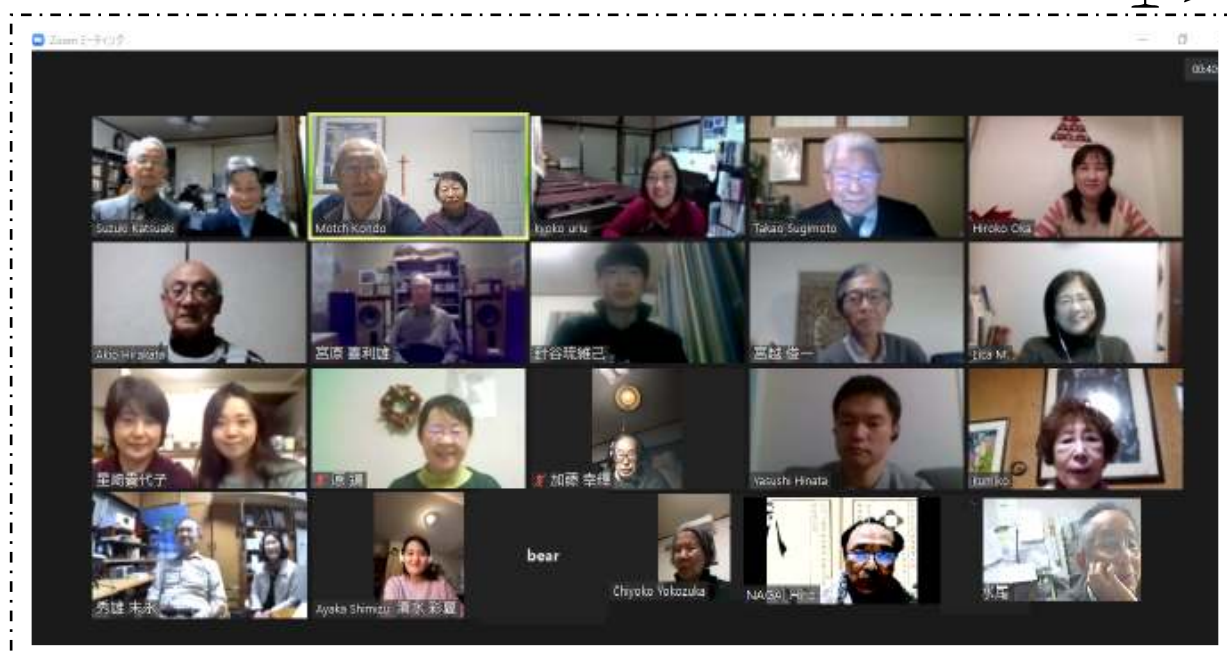
近郊にあって戦後不要となった狭軌鉄道を復興して、新たなSL列車“エクスレ鉄道”(株)の設立に参加した彼女が、設立時発行の株券を私に贈ってきた。これが縁となりエクスレ(株)(<https://oechsle-bahn.de>)のその後の増資に多くのぐんま日独会員の参加・協力がえられた。今、このエクスレ鉄道には多くのSL鉄道ファンがドイツ内外から訪れて活況を呈している。因みに当社発行の6種の株券は図柄の美しさも加わって人気は上々、国際マーケットでも高く評価されている。

1965年、研究留学でお世話になったハウス管理人のM.マイヤーから始まり、彼女の遠縁にあたるM.シコラに至る半世紀以上にわたる彼女らとビベラッハとの交流を通して、国境、人種を超えた人類愛の偉大な永遠性を今、改めて強く感じている。

終わりにM.シコラのご冥福を祈って稿を閉じる。

11. オンライン懇親会

コロナ一色に染まった2020年も終わろうとしているころ、それまでのうっ憤を晴らそうと懇親会をやるということになった。とはいってもこういうご時世、オンラインでの開催だ。もちろん初めての企画。準備の打合せも入念にやった。時間帯は土曜日の比較的家にいる方が多い19時半からの開始とした。その結果25名の参加を得られた。ドイツ留学中の会員のドイツからの参加や定例のドイツサロンには時間の関係で参加できない会員の参加もあり、バラエティーに富んだメンバー構成となった。ふだんあまり知らない側面を知ってもらおうと参加者一人ひとりに自己紹介をしていただいた。ドイツとのかかわり、自慢話、失敗談、進学のこと、就職のこと、夫婦参加者の馴れ初めのこと、いやあ、いろんなことが分かりました。もっと続きをききたかったなあ。でももう眠たいな、ということで3時間にも及んだ楽しいひと時に幕を引きました。(親睦会幹事)



12. 編集後記

今年から広報担当者が任命され、ハイマートの編集・発行に携わることになりました。今まで事務局で行われてきたものですが、その多様でバランスの整った仕上がり、効率的な発行作業の遂行に対し唯々頭が下がる思いでした。また長期連載の原稿をタイムリーにお届け下さる殊勝な会員、多忙な日常活動の合間に快く原稿を書いて下さる役員や、多数の一般会員の方々に支えられて現在に至っていると思います。今回は文学的センスに長けた女性2人との共同作業でしたが、取材から編集及び発行までの主要な仕事を引き受けていただけただけのお陰で完成まで漕ぎつけることができました。皆様への感謝の半年でした。(E)

** Instagram 始めました! **

ぐんま日独協会の Instagram を開設しました!

協会の活動やドイツに関する情報など、新たな情報発信ツールとして、アップしていきたいと思えます。

また、こんな情報載せてほしい!! などありましたら、事務局までご一報ください。



フォローしてください!

jdgunma
